

JOMF 派遣医師便り (2014. 1)

◆シンガポール◆

シンガポールの病床不足

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

シンガポールでは病院のベッドの数が足りないという記事がつい先日の新聞にのっていた。そのため、800床の規模のある Changi General Hospital は大規模なエアコン付きのテントを張りその中にベッドを設置したという。また、1200床ある Tan Tock Seng Hospital では仕方なしに病棟の廊下に 49 のベッドを設けたとのことである。Changi General Hospital の関係者によるとベッドの占有率は先月は 100%を超えており、救急で入院が必要と判断されても 24 時間以上待たなければ入院できない患者もいたとのことであった。このため、仕方なく、近くの療養型の病院のベッドも借りている状況になっているという。

急性期の患者を看る病院の入院患者が急性期が過ぎても、退院を拒むケースがあるという。理由は家族が休暇に出かけてしまい、自分を看てくれる人が家にいない。そもそも家族がいないなどの理由だとのことである。療養型の病床の少なさが伺える。

2012 年の政府の発表によればシンガポールのベッド数は 25 の病院（急性期、療養型ともに含む）に 10756 床である。これは人口 1000 人当たり 2.0 ということになる。平均の入院期間は 5.8 日とのことである。（ちなみに日本では人口 1000 人当たり 13.9、日本の一般病床の平均在院日数は 21.4 日）

ベッド数がこの少なさで済んで来たのは平均在院日数の短さもさることながら、シンガポール人の平均年齢が 33.9 歳、65 歳以上人口の割合が 9.9%（2012 年）であり、まだまだ高齢化社会にはなっていないため、有病者が比較的少ないこととも関連があると思われる。（ちなみに日本人の平均年齢は 44.9 歳(2011 年)、65 歳以上は 24.4%(2013 年)。）（もちろん、保険制度の違いがあることも大きな理由であるが、今回は触れません。）

現在、新たな病院の建設がいくつか進められており、今後、シンガポール保健省は、2020 年までに急性期のベッドを 1900、療養型のベッドを 2600 増やす予定であるという。

しかしながら、シンガポール人も平均寿命は既に 80 歳を超えており、これから急速に高齢化が進むと考えられている。今後の政策が気になる所である。日本からそうした分野に注目しビジネス展開を考えている向きもあるようである。